

- 1. 人権が尊重され、誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり
- 2. 良好な環境が整った、快適で安全・安心なまちづくり
- 3. 活力ある産業に満ちた、にぎわいあふれるまちづくり
- 4. 明日の彦根市を担う人を育(はく)むまちづくり
- 5. 人とひととの交流をひろげ、市民文化を創造するまちづくり

ひこね宿場探訪



いよいよ弥生3月、寒さもやわらぎ行楽の季節となってきました。遠くに赴くのも良いものですが、皆さんが住んでいる身の回りにも新しい出会いや発見があるかも知れません。

それまで何気なく見ていた建物が、眺めていた風景が、通っていた道が、実は深い歴史をもっていて、そのことを知った瞬間に、それらが歴史物語を語り出し、私たちに感動を与えてくれることでしょう。

今回は、市内にある中山道の2つの宿場、「鳥居本宿」と「高宮宿」についてご紹介します。

問い合わせ先
市教育委員会文化財課
☎26-58833番、FA
X26-58899番

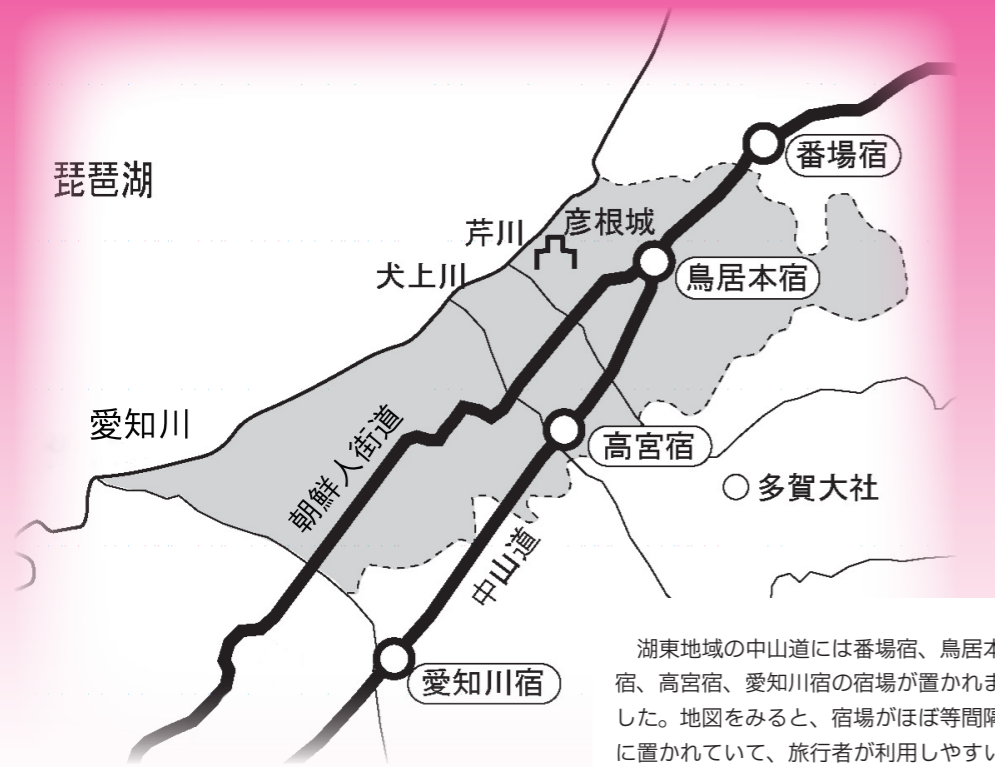
鳥居本宿 高宮宿を行く



▲風情が残る鳥居本宿(上)と高宮宿のまちなみ

交通の要衝にできた 2つの宿場

ようしよ



湖東地域の中山道には番場宿、鳥居本宿、高宮宿、愛知川宿の宿場が置かれました。地図をみると、宿場がほぼ等間隔に置かれていて、旅行者が利用しやすいようになっていることが分かります。

▲湖東地域の中山道通過ルート

まず、これら2つの宿場が置かれた中山道についてご紹介します。中山道は、江戸幕府が制定した五街道(東海道、中山道、日光道、甲州道中、奥州道中)の一つ、江戸日本橋を起点に京都までを結ぶもので、太平洋沿いを通る東海道と同様に重要なルートとなっていました。

この中山道の原形は、7世紀の半ばに敷設・整備された東山道として始まります。その名が示すとおり京都から見て東方へ通ずる山間の道であり、東国への経済上、軍事上の連絡路として重要な役割をもっていました。その道中には疲弊した馬を交代させる駅が置かれ、中継拠点の役割を果たしていました。

中世(鎌倉時代)に入ると幕府が鎌倉に置かれたことで、東国と京都とを往来する旅行者が格段に増えます。その中で、鈴鹿越えの難所を避ける形で東海道が美濃(今の岐阜県)で東山道に合流し、近江の岐阜(今)で東山道と東海道が同じルートを通ることになり、東山道の重要性はさらに高くなりました。近世(江戸時代)には、江戸に幕府が開かれたことにより、重要な街道である東山道は中山道として再整備されることになりました。その中で宿場や一里塚、常夜灯などが配置され街道の利便性を高めました。



▲鳥居本町にある道標

江戸時代の宿場も、それ以前のものと同様に公用の人馬をリレー方式で継ぎ立てし、幕府が定めた特権的な通行を円滑にすることを本来の目的としていました。

このため宿場には、定められた人馬を常備し、労働や人馬の提供を要請する助郷賦課などを行った問屋場、宿泊するための本陣や脇本陣、旅籠などの施設が置かれました。また、自炊で宿泊する安価で庶民向けの木賃宿、休憩場所としての茶屋、商店、幕府による禁制や達しを広報するための高札場などの施設が建ち並びました。

中山道が通過する滋賀県は、東国から京都に入るためには避けては通れない立地条件をもつことから、古代以来、街道の整備に力が注がれてきました。現在でも、名神高速道路や東海道新幹線、JR東海道本線などの交通網が滋賀県を縦貫し、まさに交通の要衝という言葉がふさわしい地域です。

特に彦根は、中山道が北東から南西に走っていて、北に鳥居本宿南に高宮宿という2つの宿場が存在します。今回は、この鳥居本宿と高宮宿について、その歴史と見所をご紹介します。